

令和元年度

文京区議会総務区民委員会 視察報告書

1 視察日程

令和元年11月6日(水)・7日(木)

2 視察先及び目的

(1) 熊本県上益城郡益城町

「災害からの復旧・復興の取組と災害時における指定管理施設の避難所運営等」に関する調査・研究

(2) 熊本県熊本市

「熊本県立美術館（細川コレクション永青文庫展示室）」に関する調査・研究

(3) 熊本県玉名市

「大河ドラマを通じた街の活性化」に関する調査・研究

3 視察参加者

委員長 名 取 顕 一

副委員長 萬 立 幹 夫

委員 田 中 香 澄

委員 白 石 英 行

委員 高 山 泰 三

委員 品 田 ひ で こ

委員 田 中 和 子

委員 松 下 純 子

委員 佐 藤 ご う い ち

同行 細 矢 剛 史 (アカデミー推進部アカデミー推進課長)

随行 増 田 密 佳 子 (区議会事務局議事調査主査)

熊本県上益城郡益城町

■町の概要

【人 口】 33,060 人（令和元年11月30日現在）

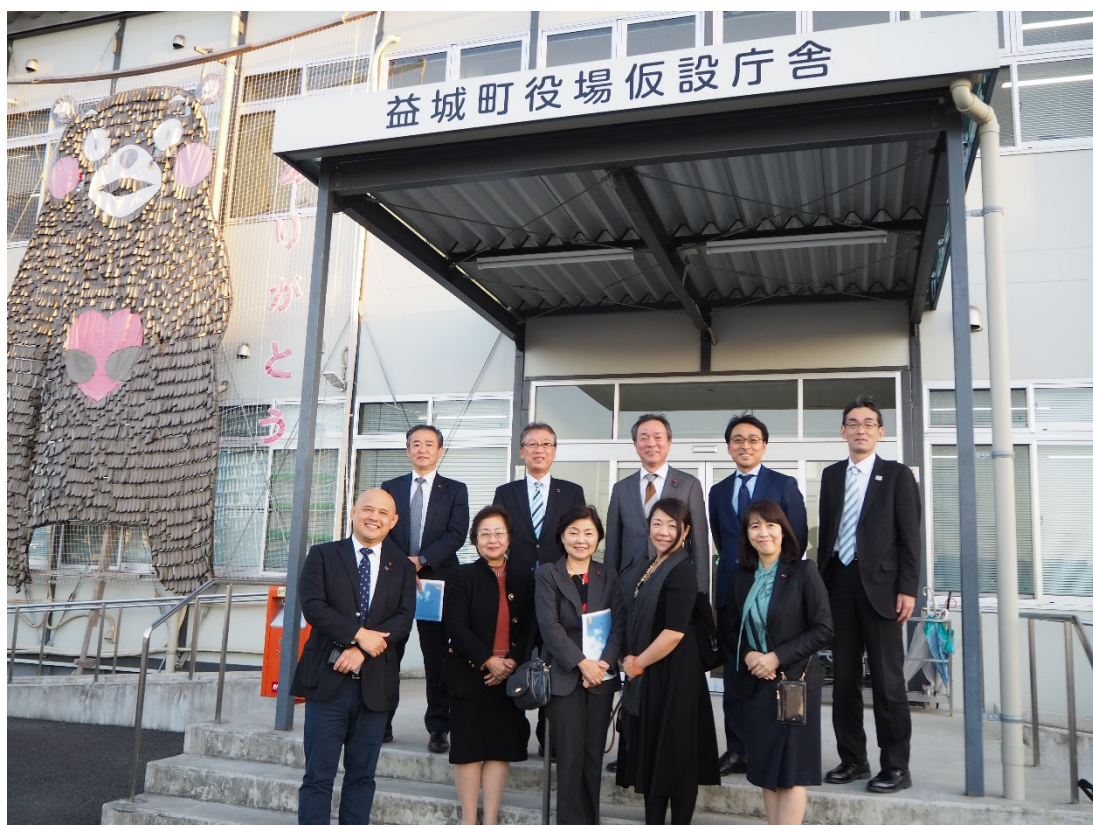
【世帯数】 13,362 世帯（令和元年11月30日現在）

【面 積】 65.68 km²

【概 要】 水と緑豊かな自然に恵まれ、肥沃な大地を有した益城町は、古くより農業を基幹産業として発展してきた。

また、熊本市の東部に隣接し、そのベッドタウンとしての機能性から人口増加が続き、それまでの農村地域から住宅都市へと様変わりし、熊本都市圏の一翼を担う町として着実な発展を続けている。

さらには、熊本の空の玄関口「阿蘇くまもと空港」、陸の玄関口である「九州自動車道益城・熊本空港 IC」などの交通拠点をも有し、その地理的な優位性を生かし、様々な企業進出や流通拠点が形成されつつある。



益城町役場仮設庁舎にて

【1日目】 11月6日（水）

「災害からの復旧・復興の取組と災害時における指定管理施設の避難所運営等」に関する調査・研究

1 視察目的

(1) 益城町役場の復旧・復興の取組

益城町は、平成 28 年熊本地震により甚大な被害を受けながらも「何でもない毎日が宝もの」を掲げ、何でもない毎日を取り戻すため、復旧・復興に向け全力で取り組んでいる。同年より文京区も職員を派遣し支援を行っている。

益城町役場では、被害状況、震災直後の様子、地震直後の課題、復旧・復興の取組を伺った。

(2) 役場職員の案内により、町内各所の復旧・復興の様子をバスから視察し、災害公営住宅整備状況の現地視察を行った。

(3) 指定管理施設の避難所運営に関して

益城町総合運動公園の指定管理者である熊本 YMCA は地震発生数時間後に益城町より指定避難所運営の委託を受け、6 か月間の避難所運営を行った。避難所立ち上げと初期の運営における課題、長期化する避難生活の支援と閉所時の課題等を伺った。

2 視察訪問先

(1) 益城町役場の復旧・復興の取組・・・益城町役場

(2) 復旧・復興の様子・・・益城町被災地と災害公営住宅

(3) 指定管理施設の避難所運営に関して

・・・益城町総合運動公園指定管理者 公益財団法人熊本YMCA

3 説明者

(1) 益城町役場

益城町議会 議長 稲田 忠則 氏

益城町議会事務局 事務局長 西口 博文 氏

益城町危機管理課危機管理係長 岩本 武継 氏

(文京区派遣) 益城町契約総務課管財係 高見 裕樹 さん



稲田 忠則 氏



西口 博文 氏



岩本 武継 氏



高見 裕樹 さん

(2) 益城町被災地と災害公営住宅

益城町公営住宅課災害公営住宅係長 水口 清 氏



水口 清 氏

(3) 益城町総合運動公園指定管理者 公益財団法人熊本YMCA

ながみねファミリーセンター館長・益城町総合運動公園所長 丸目 陽子 氏
木山仮設団地 佐藤 忍 氏



丸目 陽子 氏



佐藤 忍 氏

4 事業概要

(1) 熊本地震の教訓 「災害からの復旧・復興の取組み」

冒頭、文京区からの派遣2年目となる職員 高見裕樹さんからの挨拶と激励。

熊本は地震がない町と言われ、信じ込まれていた為に備えがされていなかった。熊本地震の特徴として、2度の震度7、震度6以上が5回、震度5以上が18回を含んだ度重なる余震で、合計4,484回。益城町は、熊本市に隣接し、空港やインターチェンジがあり、交通利便性に優れ、田園と都市が調和したベットタウンとして、また、物流関係の誘致に成功し、震災前までは人口増加傾向にあった。

しかしながら、熊本地震により34,499人から1,498人減少したままの水準が続いており、今後は人口増加に向けた取組が必須となっている。

益城町の震災被害は甚大で、98%の住宅が被害を受けたことから、ほぼ全ての住民が避難者となった。更に、17か所の避難所のうち7か所しか開設できなかったことで、福祉避難所にも大勢の人が押し寄せ、避難所は大混乱の状態であった。避難所不足、度重なる余震の影響もあり、多くの青空避難者、車中避難者が町内全域に存在することとなった。

町役場（役場本庁舎）自体の被災したことで役場が機能せず、職員の参集状況などの未把握から初期対応の遅れに繋がってしまった。復旧支援を通して、他の自治体（特に総社市、奈良、鹿児島等や民間企業等との関わりが現在の災害協定

相互支援の基盤となったとの事。) 今後、復興大使制度やNTTドコモとのワークショップで制作したPR動画(15000回再生)、地元農産物の商品開発 若者の活動応援など未来に向けた街づくりも進めている 「なんでもない毎日が宝物」熊本地震を経験した事で「なんでもない毎日」を取戻し、築きあげるため、住民、町、議会など関係者が一丸となり全力で復旧復興に取り組んでいる。



質疑応答

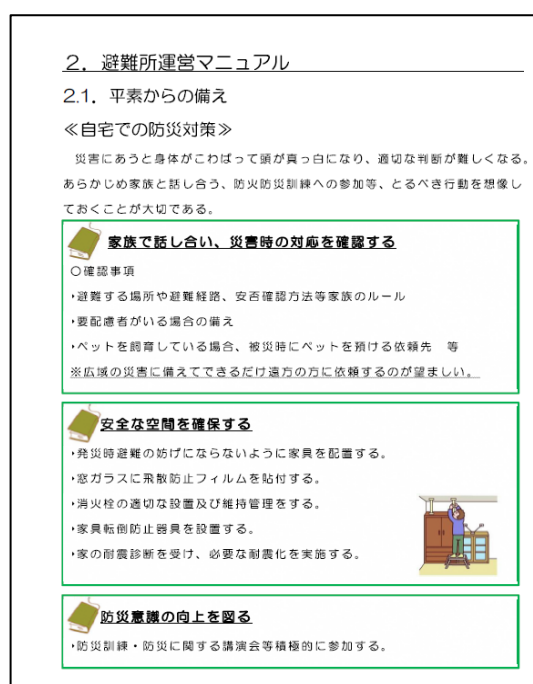
Q：復興に入ってからの一番の課題はなにか？

A：特に人が足りない…特に技術系職員（建築係）、マンパワー不足であり、任期付き職員の採用が試験的に始まった。

避難路の確保…災害に近い道路ネットワークの構築が課題復旧に対しては大丈夫だが復興が難しい。(震災直義の年間予算が約100億円の益城町で1,500億円かかると言われた。)

Q：益城町の避難所運営マニュアルはあるのか？

A：HP上で「益城町避難所運営マニュアル」(以下参照、一部抜粋)を公開。



受領資料

「震度7×2からの復興」平成28年熊本地震からの復旧・復興に向けた取組
災害時における福祉避難所に関する懇談会資料

「熊本地震時の福祉避難所の対応」

(2) 益城町被災地と災害公営住宅（畑中団地）

益城町における災害公営住宅の整備について伺った。

<災害公営住宅の目的>

平成28年熊本地震により、住宅を失い再建できなかった方へ、生活の安定と社会福祉の増進に寄与することを目的に整備された。



建設中の災害公営住宅 畑中団地
(畑中団地の隣)

<災害公営住宅の供給にあたっての考え方>

平成28年12月に策定した「益城町復興計画」及び災害公営住宅検討委員会で提案された意見を基に、入居希望者のニーズや入居後の暮らしやすさなどに配慮した。

<供給方式>

町による住宅建設に加えて、民間が整備した住宅を買い取って被災者に提供する「買取方式」や民間賃貸住宅を町が借り上げて被災者に住宅を提供する「借上方式」など多様な供給方式の導入が検討されている。

<供給場所>

住宅は、当初まとまったところに整備するのがいいのではないかと意見があったが、「地元から離れたくない、地元に戻りたい」との声を受け、益城町全域に点在させる形で、大きくは、市街地と集落部で供給をはかった。



連なる2つの家屋の間に
災害路がある畑中団地

<供給戸数>

益城町全域の671戸21地区に整備することを目標とし、被災者の自力再建の推進を図りながら、町の中長期的な財政状況も勘案し、民間賃貸住宅の供給動向なども踏まえ、必要な戸数の見直しをとしている。建物の構造についても、集落だったところは街並みに馴染むよう、木造平屋建て二戸一、市街地はRC鉄骨・階層建てで建設している。入居にあたっては、住民説明会で家賃・共益費などの算定について等知らせ、その後、希望アンケートをとり、仮申し込み、入居の希望をとった。

質疑応答

Q：災害公営住宅を建設するにあたり、障害となったことは何か？

A：農地法の縛りがあり、どこでも住宅を建てられるわけではなかった。

Q：平屋二戸一の住宅で工夫した点は？

A：以前は農村地で集落だったので、鉄筋コンクリートは馴染まないのも木材を使った。

また、住宅の間に通路を作って災害路を確保した。

Q：仮設住宅から災害住宅へ転居する際の課題は何か。

A：仮設住宅は家賃がかからなかったが、公営住宅は家賃が発生するので、丁寧な住民説明会をした。

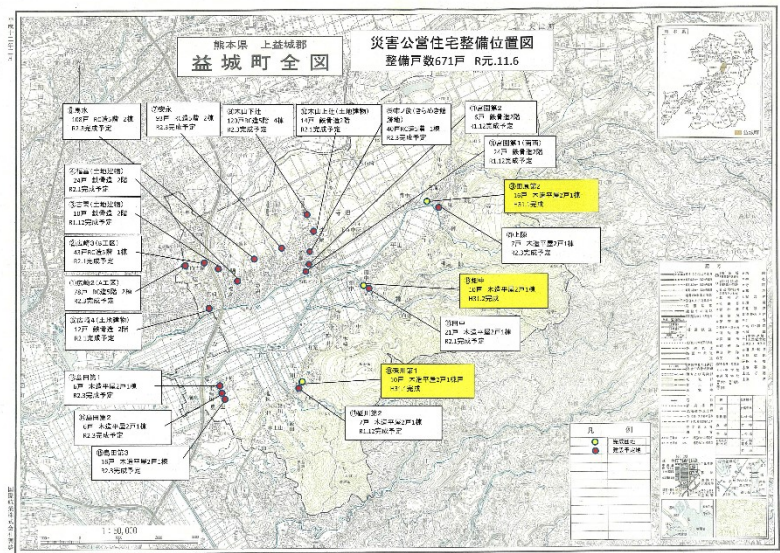
受領資料

益城町災害公営住宅整備状況



上：視察した畑中団地 概要

右：益城町災害公営住宅整備位置図



(3) 指定管理施設の避難所運営に関して(木山仮設団地内集会場「みんなの家」にて)

対応いただいた丸目氏は、平成 28 年 4 月 14 日の地震発生を経験し、避難所運営等に当たられた当事者あり、現在も益城町で支援活動を続けておられる。指定管理者として運営する施設が突然指定避難所になるという前例のない事態に対し、避難所運営の組織作りから避難所閉鎖に至るまでの公益財団法人熊本 Y M C A (以下「Y M C A」という。)の指定管理者としての支援活動を伺った。

<地震発生と指定避難所委託>

地震発生から間もなく、総合運動公園にある体育館に避難を求める人たちが押しかけてきた。安全が確認できた武道場へ避難者を誘導、しかし、入りきれない人たちから体育館に入れてほしいと懇願されたが安全性が危惧され、入れないように鍵をかけた。その後、体育館の天井が落下した。まさに、運命の分かれ道であった。その後、天井がむき出しになった体育館の安全を確認し、避難者を入れた。深夜に指定避難所として益城町役場より避難所として運営委託を受けた。



再建中の益城町総合体育館

<避難所立ち上げと生活支援>

「関連死を出さない。命を守ること」を目標に避難所運営を始めた。幸いにも Y M C A には関東大震災をはじめ、様々な災害支援を行ってきた蓄積があった。

やがて自衛隊の炊き出しが始まったが、食事が避難者の手に届くには 1 時間半も待ち時間があった。国交省が PUSH 式の仮設トイレを設置したが、タンクに水を入れたり、汲み取りなど管理が大変であった。医療専門ボランティアも到着、救援物資も届き始め、配布作業に追われた。Y M C A の全国のネットワークを通じ、スタッフの派遣や物資を要請しながら避難所運営の組織作り進めた。役場との連携は大切に、相談しながら行った。



(熊本 Y M C A 説明資料より)

<長期化する避難生活と避難所閉鎖>

車中泊の人も増え、場所取りの問題が生じた。テント村がたくさんでき、体育館で食事を配った。しかし、テントの中が見えない、ペグがしっかりしていない、

中に子どもが放置される、熱中症の高齢者が出たりしたため、テント村は梅雨が始まる前の5月30日に撤去になった。

体育館のむき出しになった天井は、150人のYMC Aボランティアによって15,000か所を手縫いしてできた天幕で覆われた。

また、丸目氏が総括責任者だったことで、自衛隊のお風呂にベビーバスを置くという男性には気が付かないアイデアが出された。ペット連れの人には

同伴別居としてペット専用のプレハブの部屋ができボランティアが世話をした。YMC Aは専門学校ももっており、障害者や介護の必要な人への支援など様々なアイデアをもらった。また、専門ボランティアとともに、役場ができない子どもの心のケア、外遊び、子育てサークルなども行った。

当初1,700人の避難者がいた体育館にも、時を経てスペースができ、一人畳2畳分のスペースをカーテンで仕切り、段ボールベッドを入れた。

そして、10月31日に避難所は閉鎖された。何らかの課題を抱える人が多く残ったが、その後、仮設に移る人達の引っ越しを手伝い、見送った。「関連死を出さない」という目標は達成できた。



テント村 (熊本YMC A 説明資料より)

<仮設住宅の委託を受けて>

仮設住宅の見守りを担当し、常時駐在している佐藤氏から話を伺った。仮設は220戸あるが今住んでいるのは100戸になった。今後は、他の仮設もすべてこの木山仮設団地に集約される予定である。集約は防犯、孤立を防ぐため行われる。ここで災害公営住宅の入居を待つ。行政は説明会を開いているが、集約には反対の人もある。集約時には巡回バスやスクールバスも出る予定である。



質疑応答

Q：指定管理者として運営している体育館は指定避難所ではなかったため、協定書に「避難所運営」の文言は入っていなかったと思うが、契約時に、指定管理施設が避難所としての機能を求められるとき、協定書等に盛り込んでおくべきことを経験から教えてほしい。

A：無償でできる仕事ではない。金額までは決められないが運営費は必要。行政、指定管理者のどちらが避難所運営の主導権をもつか、行政の役割は大切であり、指定管理者はサポートである。運営方法や役割分担も必要。災害時の訓練も一緒にしておくとうい。

Q：行政の職員は避難所に常駐していたのか。

A：住民サービスや届け出のことなど、役場に関することは指定管理者では答えられないため、職員は来ていた。行政がどこを受け持つかすみ分けが大切。ミーティングにも入ってもらった。

Q：トイレの清掃はどのように行ったのか。

A：トイレは命を守るための要であり、薬剤師に掃除の仕方、薬剤のそろえ方を教わった。100基近くあるトイレの掃除をボランティアと住民に任せるのは無理がある。さらに、掃除をする人が感染する恐れもあり、私の中で答えは出ていない。

Q：食べ物の配布は

A：食中毒を出さないために、大変申し訳なかったが、素手で握ったおにぎりは受け取れなかった。このため作った人から怒鳴られたこともあった。保健所の規定でカットしたものや、生野菜は配れなかった。体調維持のために暖かい物を出すことも必要で、週2回暖かいスープや味噌汁を出してくださる団体に依頼した。

受領資料

「支援活動から見えてきた課題と対策 明日へつなげる使命を得て」

熊本YMCA発行



木山仮設団地内集会場 「みんなの家」にて

熊本県熊本市

■市の概要

【人 口】 733,634 人 (令和元年11月1日現在)

【世帯数】 343,607 世帯 (令和元年11月1日現在)

【面 積】 390.32 km²

【概 要】 熊本市は、熊本県西北部に位置し、金峰山を主峰とする複式火山帯と、これに連なる立田山等の台地からなり、東部は阿蘇外輪火山群によってできた丘陵地帯、西部は白川の三角州で形成された低平野からなっている。清らかな地下水や豊かな緑などの自然環境に恵まれ、熊本城を始めとする優れた歴史遺産や豊かな伝統文化を受け継ぐ、九州中央の拠点都市である。平成24年4月1日に政令指定都市となった。

また、平成27年10月21日、同市、熊本県、新宿区及び文京区は「文化と歴史を縁とする包括連携に関する覚書」を締結した。



熊本県立美術館にて (背後は修復工事中の熊本城)

【2日目】 11月7日（木）

「熊本県立美術館（細川コレクション永青文庫展示室）」に関する調査・研究

1 視察目的

文京区目白台に、公益財団法人永青文庫（以下、「永青文庫」という。）がある。これは、細川家が伝えてきた歴史資料・美術工芸品・古建造物など貴重な文化財、および近現代において収集された国内外の優れた美術品や書籍等の保管・修復・調査研究を行う財団である。

今回の視察は、永青文庫とゆかりの深い、熊本県立美術館内の別棟に設置された細川コレクション永青文庫展示室を实地調査し、担当学芸員等の現場の声を伺うことにより、今後の文京区と永青文庫との連携事業や、文京区の文化事業の可能性を探ることが目的である。

2 視察訪問先

熊本県立美術館（細川コレクション永青文庫展示室）

3 説明者

館長 宮尾 千加子 氏
副館長（学芸課長）有木 芳隆 氏
参事 才藤 あずさ 氏（解説：熊本城と武の世界）
主任学芸員 宮川 聖子 氏（解説：勇姫）



宮尾 千賀子 氏

4 事業概要

熊本県立美術館は国の特別史跡である熊本城の二の丸公園の一角に位置する総合美術館である。昭和51年3月にオープンした。

建物の建築は、世界遺産登録された上野西洋美術館を設計したル・コルビジエの弟子である前川國男（上野の東京文化会館や東京都美術館も設計した）の手によるものである。築年数は40年以上経過するものの、手入れも行き届いており古さを感じさせるものではなかった。



熊本県立美術館

今回視察した箇所は、以前多目的室として別の展示を行っていた部屋であったが、国宝や重要文化財の展示も可能な施設にリニューアルし細川コレクションを常設

展示しているエリアである。平成 20 年 4 月に「細川コレクション常設展示室（別棟展示室）」、さらに平成 24 年 4 月に「細川コレクション常設展示室（本館 2 階第一室）」をオープンさせたものである。

本美術館は国の特別史跡内に設置されているため、建物の増築など外構工事を伴う、工事が困難である。そのため別棟展示室は広さが約 160 平米とやや手狭であるが、展示の内容を年 4 回変更するなどの工夫をこらしている。

なお、美術工芸品の多くは基本的に永青文庫が保有しているが、一部の武具甲冑及び、古文書の多くが熊本県に寄贈されている。永青文庫とは企画展のたびに展示品を互いに融通し、美術品を運搬するためのトラックを年 3 回東京熊本間、往復させている。

我々が訪問した際は、別棟展示室においては、「細川コレクション勇姫展～幕末維新期を生きる細川家のお姫様～」という企画展が展示中であった。

展示の内容であるが、福井藩 16 代藩主・松平春嶽に嫁いだ細川斉護の三女・勇姫（いさひめ）の足跡をたどるものである。婚礼調度品や文書など約 40 点で生涯を辿っている。

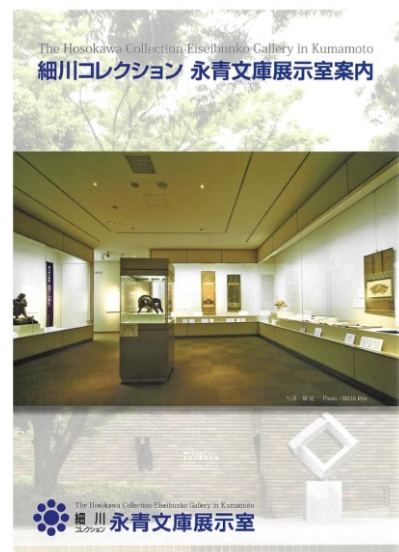
勇姫は天保 5（1834）年生まれ。16 歳で 22 歳の春嶽と結婚した。結婚の半年後に、両家の女中同士の確執などで離婚協議問題が起きたため、春嶽が離婚を回避しようと蓮性院（斉護の義母で春嶽の叔母）に助けを求めた書簡の写しも並ぶ。会場には、桜やフジなど季節の花々を配した勇姫愛用の振り袖や、九曜紋や牡丹唐草の蒔絵が施された化粧道具などを展示されていた。

離婚の危機を脱した後の夫婦仲は良好で、春嶽が大事にしていた勇姫の肖像写真などからも仲の良さが伝わる。勇姫は、熊本の思想家で春嶽の政治顧問として活躍した横井小楠の福井藩招聘にも尽力した。11 月 19 日から展示の一部を入れ替えるそうである。

本館においては「熊本城と武の世界」という企画展が展示中であった。

これは平成 28 年の熊本地震により被災した、熊本城大天守の外観修理完成を記念して、熊本城主・加藤家、細川家の「武」にまつわる歴史資料や美術工芸品を紹介したものである。

展示及び学芸員の解説によれば、熊本城のはじまりは、室町時代の文明年間（1469 年～1487 年）に肥後守護菊池氏の一族・出田秀信



が千葉城（現在の千葉城町）を築いたのが始まりである。

その後紆余曲折を経て、1587年、豊臣秀吉の九州平定に際し、薩摩の島津氏に属していた親冬の孫・城久基は城を明け渡して筑後国に移った。その後、新たに肥後の領主となり隈本城に入った佐々成政は、秀吉の指示に反して検地を強行し、肥後国人一揆を引き起こす。この時、隈本城は国人衆による猛攻を受けたが、城代の神保氏張が死守して落城は免れている。天正16年（1588年）、成政は切腹を命じられ、加藤清正が肥後北半国19万5千石の領主となり隈本城に入った。



元来の城が築かれていた場所は現在の茶臼山丘陵ではなかった。しかし、城の防御性能を高めるため、加藤清正が1591年に茶臼山丘陵一体に城郭を築きはじめ、1600年頃には天守が完成。同年の関が原の戦いの驍将で加藤清正は肥後一国の領主となる。1606年には城の完成を祝い、翌年「隈本」を「熊本」に改め、それが現在の熊本城となったものである。

1610年から通路によって南北に分断されていた本丸に通路をまたぐ形で本丸御殿の建築が行われた。これにより天守に上がるには、本丸御殿下の地下通路を通らなければならないような形状になったのである。

今回の展示は城の歴史のみならず、加藤家、細川家の武具や屏風などの貴重な品々も多く展示されていた。時代の経過に伴う甲冑の様式の変化などが詳しく解説しており、特に歴史に深い造詣のない来館者にも理解しやすいものであると感じられた。

別棟、本館の双方とも、学芸員の大変わかりやすく面白い解説が印象的であった。

また、来年のNHK大河ドラマの主人公は明智光秀であり、細川忠利の祖父にあたる（忠利は細川ガラシャの子である）。

今年の「いだてん」に引き続き、熊本が再び注目を浴びるのではないかと期待しているとのことであった。



質疑応答

Q：3年前の熊本地震の際、被害はどうだったか。

A：建物のタイルなど一部損傷はあったが、所蔵品はかねてより地震への備えをしておき、問題はなかった。

展示品も余震（最初の揺れ）の段階で、万が一に備え、安全な場所に避難させていたため、本震があっても問題がなかった。

Q：来場者数は

A：一日平均 280 人くらい、企画や時期によっても上下はあるが平均するとそのくらいである。

Q：学芸員は何人体制でやっているのか、雇用形態はどうなっているのか

A：学芸員は9名でやっている。全員、熊本県の職員である。



Q：熊本城を修復するには何年かかるか？

A：文化財であり修復には大変手間も時間もかかる 10 年になるか 20 年になるか現在ではわからない。

例えば、崩れた石垣はかなり急勾配に積まれていたものの、石の設置場所なども元のおりに積み直す必要などがあり、困難も多い。しかし、画像認識の AI 技術を活用するなど方策もあり、期待している。おそらく修復費用は数十億円になるだろう。

6 文京区の施策展開へのインプリケーション

学芸員の方々の見事な解説に一同舌を巻いた。

文京区も文化行政を深耕するにあたり、学芸員を始めとする人材育成は大きなカギになるであろう。

また、永青文庫が持つ文化財の物量及び質の高さを改めて認識した。地域の貴重な資源としてもっと区政との関わりを深める必要があると感じた。大河ドラマのテーマが細川家に浅からぬ縁のある明智光秀であるのは文京区にとってもチャンスであり、今後の文化事業の展開に活かすべきであると思った。

受領資料

熊本県立美術館案内

熊本城と武の世界

図録・リーフレット

熊本城と武の世界 出品目録

ISAHIME 細川コレクション「勇姫」

図録・リーフレット



熊本県玉名市

■市の概要

【人 口】 66,239 人 (令和元年11月30日現在)

【世帯数】 27,983 世帯 (令和元年11月30日現在)

【面 積】 152.60 km²

【概 要】 玉名市は、熊本県北西部に位置し、熊本市と大牟田市の中間にあり、有明海、菊池川、小岱山及び金峰山系の山々などの豊かな自然や数多くの歴史的資源に恵まれている。

産業面では、米やみかん、イチゴをはじめとする野菜、果物等の農産物やノリなどの水産物の生産が盛んで、市街地の北部、小岱山の麓には1,300余年の歴史と泉質の優秀さを誇る玉名温泉がある。

九州新幹線鹿児島ルート全線開通に伴い開業された新玉名駅により、熊本都市圏と福岡都市圏への交通の利便性が向上したことで、県北の交通の拠点として今後の発展が大いに期待されている。

また、令和元年11月7日、この視察中に、同市と文京区は「玉名市と文京区との相互協力に関する協定」を締結した。



玉名市議会 議場にて

【2日目】 11月7日（木）

「大河ドラマを通じた街の活性化」に関する調査・研究

1 視察目的

大河ドラマ「いだてん」及び金栗四三氏に関する玉名市の取組み調査・研究

2 視察訪問先

玉名市役所・玉名市議会

いだてん大河ドラマ館

玉名市歴史博物館

<視察先対応者>

【玉名市議会】

玉名市議会 議長 中尾 嘉男 氏

金栗四三地域創造戦略特別委員会 委員長 多田隈 啓二 氏

議会運営委員会 委員長 西川 裕史 氏

建設経済委員会 委員長 田畑 久吉 氏

総務委員会 委員長 内田 靖信 氏

文教厚生委員会 委員長 徳村 登志郎 氏

議会広報公聴特別委員会 委員長 北本 将幸 氏



玉名市議会の皆様

【玉名市】

産業経済部首席審議員 石井 利幸 氏

金栗四三 PR 推進室長 津川 隆一 氏

金栗四三 PR 推進室係長 原田 貴央 氏

(左から 石井 利幸 氏、
津川 隆一 氏、原田 貴央 氏)



3 事業概要

■視察先対応者説明（取組の目的・経緯・特徴）

(1)玉名市議会としての取組・経緯

・議会独自の取組として「金栗四三地域創造戦略特別委員会」（委員 11 名）を設置。目的は、大河ドラマを活用した①地域活性化 ②地域振興、集客、誘客 ③金栗四三記念とした事業とする。

さらに、3 部会に分かれて週 1 回～2 週 1 回のペースで委員会開催し、市の取組よりスピーディーに進めた。①観光部 ②PR 宣伝部 ③飲食・おもてなし部
・また「議会 PR 動画」を企画・作製しユーチューブに配信した。

内容は、全議員が 3 常任委員会に分かれて、全員協議会・代表者会議の様子や 3 部構成で撮影した。

①総務委員会（玉名市ラーメン） ②建設経済委員会（温泉足湯）

③文教構成員会（金栗四三の母校 玉名高等学校）

議員全員自費で作成 作成費用約 12 万円（@5,500 円/一人負担）
テロップは、地元のケーブルテレビの協力を得てユーチューブで発信中。

視聴回数目標 1 万回（現在約 7 千回）

※「皆さんも是非観てください。」とのこと。



上：たまな市議会だより

右：議会作成の

玉名市PR動画

(YouTubeより)



(2)玉名市役所としての取組・経緯・予算。

・2019年大河ドラマ「いだてん」の主人公の一人、また日本初のオリンピック選手「金栗四三」氏を玉名市の「名誉市民」とした。NHKの「大河ドラマ」への誘致活動はしておらず、選ばれた理由は、来年の東京2020オリンピック・パラリンピック大会開催によるものと考えられる。

・千載一遇のチャンスとして「大河ドラマ関連事業」を企画、玉名市の魅力や経済効果を期待して展開している。

① カウントダウン事業・・・庁内入口にカウントダウンボード（玉名工業高校生徒作成）を設置、公用車等にPRラッピング、職員の共通ポロシャツ・ジャンパー作成、また観光等地域振興にPR活動を展開した。



玉名市役所1階に設置されたボード

② 玉名市・和泉市、南関町大河ドラマ「いだてん」地域振興協議会」設置・・・観光や地域振興を目的。3自治体を一体的、かつ広域的に積極的に発信するため「金栗四三」PRロゴマーク作成、「金栗四三」ゆかりの地として誘客推進業務（観光商品・旅行社への情報提供）。共通の半被、ジャンパー、のぼり作成しPRに努める。

③「玉名市いだてん地域振興協議会」・・・今回のドラマを契機に「金栗四三」氏が残した功績や日本のスポーツ振興にかけた熱意を故郷玉名市から全国に発信する。



金栗 四三 ラッピングマイクロバス

④ レガシーとして、市では「フルマラソン大会」を2020年2月23日に開催し、偉業を受け継いでいく予定。

質疑応答

Q：大河ドラマ事業の事業経費5億6千万円に対し、国と県との交付金・補助金の関係は如何か？

A：国の地方創生推進交付金や県の地域づくり夢チャレンジ推進補助金など7500万円を活用し、単年度ベースでは熊本地震復興基金交付金やスクラムチャレンジ推進補助金を活用。

一般会計からの支出については、玉名に訪問又は知って頂く事による経済・地

域活性化へ波及効果を千載一遇のチャンスと捉え、各部署においてもPR予算を進めると共に次世代に継承される仕組みを構築してきた旨を議会に報告している。

Q：地域産業の活性化・連携状況は如何か？

A：地域協議会を立ち上げ、各種団体が参加のもとPRや商品開発を行ってきた。肥後銀行が県内小・中学生に大河ドラマ館の無料招待券を配布するなど取り組みは進んできたが、商品開発にはIOCからの規制があり、「いだてん」に関する商品の規制は大変厳密であった。



Q：市議会に平成30年設置された「金栗四三地域創生戦略特別委員会」と行政の関係は如何か？

A：市に金栗四三PR推進室が設置され職員4名でスタートした中、市議会と一緒にPRを推進する趣旨で設置され、週に1回の委員会開催を行い、提言を頂きながらできることからやってきた成果は大きい。また、議会が作成したPR動画も評価されている。

Q：記念マラソン大会とは、新設されたものか？警察等の協議は如何だったのか？

A：約3年の調整を経て6,000名参加している既存の横島いちごマラソン大会のハーフマラソンをフルマラソンに変更し参加2,000人枠で来年2月に実施する。

受領資料

- ・大河ドラマ「いだてん」に関する事業説明（玉名市作成）
- ・「いだてん大河ドラマ館」の整備状況等（玉名市産業経済部）
- ・スーパーヒーロー金栗四三ガイド「びっくりかなくり」
- ・「いだてん大河ドラマ館」（来場者に配布ガイド）

■ 「いだてん大河ドラマ館」事業説明と現地視察



平成31年1月12日～
令和2年1月13日迄の
期間限定開催
館内は、「ドラマゾーン」と
「史実ゾーン」
（ドラマと体感シアター）で展示

- ・総事業費：4億5千万円
 - 建設費 103,687千円、(撤去費含む)
 - 展示工事費 194,400千円
 - 販売管理費 122,081千円
 - 情報発信費 11,950千円
 - その他経費 18,800千円

・補助金、交付金を活用し、残りの市の負担額約3億7千万円は、30年度・31年度2か年で執行する。

国：「地方創生推進交付金」15,400千円

熊本県：「地域づくり夢チャレンジ推進補助金」10,000千円

「県広域連携プロジェクト推進補助金」9,918千円

「復興基金交付金」37,000千円

- ・地元地域の方の寄付やふるさと納税も多くいただいた。
- ・ドラマ館と併設に地元物産販売や地元企業、銀行も協力し街の魅力を発信。
- ・「いだてん商品」を製造販売したかったが、残念ながらIOC（スポンサー）やNHK等の許可が得られず、金栗四三をPRするしかなかった。



いだてん大河ドラマ館内の様子

■「玉名市歴史博物館こころピア」現地視察

・金栗四三氏の幼少期からの写真やゆかりの品、功績が展示されていた。

・4つのエピソード

①日本初のオリンピック・・・1912年（明治45年）第五回ストックホルム大会に出場

②世界記録を3回更新・・・現役中非公式ではあるが、2時間19分20秒3の世界最高タイム。

③日本のランニングシューズの元祖、金栗足袋で激走・・・足袋屋「ハリマヤ」は文京区にあった。



■「玉名市と文京区との相互協力に関する協定」締結

会場：玉名市歴史博物館こころピアにて
15:00～

・総務区民委員会委員全員で、相互協定の場に立ち合わせて頂いた。



視察を終えて

名取 顕一 委員長

被災地からの経験と、新しいつながりをこれからの文京区ために

今回の視察は文京区と馴染みの深い熊本県益城町と玉名市への視察でありました。

益城町では、文京区から派遣されている職員を激励後、現在の復旧状況についてお話を伺いました。益城町全体の98%の家屋が被災、ほぼ全ての住民が避難者となっ



たあの震災から3年、町は落ち着きを取り戻してはいますが、未だ仮設団地にお住まいの方もおり、完全な復旧・復興はいまだ道半ばという印象を受けました。その後、体育館の指定管理者だった熊本YMCAの当時の担当者から生の声を聞くことが出来ました。体育館が混乱状態になった当時、指定管理者の契約条項にないとっさの判断、その後の避難所運営に関わる様々な問題に対応していく中での行政との意思疎通等、難しい問題を改めて感じる事が出来ました。文京区のこれからの防災計画に今回の視察の視点を入れていければと感じました。

玉名市では、大河ドラマ「いだてん」日本マラソンの父金栗四三さんつながりがご縁で相互協力に関する協定の締結式に立ち合わせてもらいました。市、市議会が一丸となって、大河ドラマを町おこしの起爆剤にしようという心意気は、しっかりと伝わりました。今回の協定をきっかけに文京区とのいい関係が築かれることを期待します。余談ですが、金栗四三さんが当時受け取った手紙が残っていましたが、その住所が東京市巢鴨宮下町〇〇番地となっており、正しく私が今住んでいる町会であることが判明しました。益々、親しみがわいた視察となりました。

萬立 幹夫 副委員長

被災地益城町での経験を、文京区に生かして

初日は熊本県益城町で地震から3年半経過した現状と復興の取り組みを伺い、災害住宅と仮設団地を視察。2日目は、熊本県立美術館の永青文庫展示室、その後、大河ドラマ「いだてん」の金栗四三氏の出身地の玉名市役所で観光事業概要の説明を受けた後、文京区と玉名市との相互協定締結に立ち会いました。大変内容の濃い、充実した視察でした。



益城町では避難所そのものが被災し6か所しか開設できなかったこと、また技術系職員が足りないことが大きな課題となりました。同時に、人口3万人余の町で630人の消防団員が災害対応に大きく貢献したことは重要と感じました。

益城町総合運動公園の指定管理をしている熊本YMCAからは、避難所運営を行った経験を伺いました。発災後2,3時間後に避難所を開設、YMCAの組織力も動員して運営体制を整えました。しかし、避難所運営の取り決めもない中での運営のため困難を極めました。追って町との委託契約を締結しましたが、文京区にとっても指定管理者が管理運営している避難所、福祉避難所と急ぎ体制や仕組の確立が求められます。

また、避難所運営のノウハウをもった人材、組織を指定管理者に加えることも検討すべきです。

田中 香澄 委員

被災住民に寄り添い続ける自治体の姿に学ぶ

2016年4月14日、熊本地震発災から2年。立て続けに2度、震度7を記録するという想定をはるかに超えた大災害からの復旧と復興の取組について、特に甚大な被害があった被災地・益城町を視察した。この間のご苦労の大変さとその道のりの長さや厳しさを目の当たりにした。それと同時に、どの自治体も教訓にし、対策を急がねばならない。



特に住宅を損失された方の生活再建につながるよう、供給された災害公営住宅の整備状況を伺う中で、自治体も被災者に寄り添い整備されたことは、将来的なことを考え、個人にも町にも、共に復興に良い影響をもたらし、被災者目線で進めていくことの大切さを教えていただいた。

また、指定管理者「熊本YMCA」が取組んだ避難所運営については、事業者のもつスキルや人脈、運営能力の高さが功をなしたが、どの施設もどの事業所も、災害時に避難所を開設する可能性がある、との視点を持つことと同時に、そのための事前ルールづくりなど細やかな協議を進めなければならない。甚大な災害が起こる可能性が地震のみならず、気候変動による風水害などの発生率が高まる昨今、指定避難所以外の施設や団体も、その役割を担う可能性を想定し、先手先手の災害対策を、本区もスピード感を持って取り組まねばならないということを改めて確認した。

白石 英行 委員

文化の発展を目指して

熊本県益城町での平成 28 年熊本地震の復旧・復興の取組では、震災直前後にも訪問させて頂き市民の状況や対応について把握してきた。今回未だ、671 世帯の災害公営住宅で生活を送る状況や災害後の二次ストレスへの対応、土地区画整理などにより新たな創出への対応を確認した。震災前、移住定住フレーズ「なんでもない毎日が宝もの」が市民と一丸となって取り戻す意識は、職員や指定管理者の説明により強く伝わりました。復興を祈念しています。



熊本県立美術館 細川コレクション永青文庫では、細川コレクションについて説明を受け特別展示「勇姫」を拝見し、保管コレクションの歴史的価値を再確認した。本区の永青文庫美術館の地域性に限らず神社仏閣展示など、更に協力頂きながら観光のあり方の拡大を期待します。

玉名市のいだてん大河ドラマ館を通じた街の活性化では、市議会も「金栗四三地域創生戦略特別委員会」を設置し、ともにPR活動を市内外に行っているものの、経済効果のある商品開発がIOCの指導下にある為、難しい事は大きな課題と感じた。また、「玉名市と文京区との相互協力に関する協定」締結が行われ、金栗氏のお孫さんが小石川に住み、第三中学校卒業生を知るなど、交流の意義は深く、両自治体のレガシーづくりを期待をします。

高山 泰三 委員

視察に参加して

今回は、益城市では災害対応、熊本県では美術館の運営、玉名市では大河ドラマを通じたまちづくり、についてそれぞれ視察させていただきました。

私が最も印象に残ったのは益城町である。

発災直後は役場本庁舎自体が被災し、庁舎が機能しない中で、消防団が大変活躍し



たという。災害対策本部が機能不全に陥る中で、消防団員同士の LINE のやりとりなどで被害状況を把握し、多くの人命が救われたとのことである。公のルートの情報伝達をしっかりとすると同時に、平素の住民同士の横のつながりも密にすることも、災害に強いまちづくりの一助になることを再認識した。

復旧・復興において、何もかも足りないが、例えば、マンパワーや予算の制約が大きいと話していた。職員も全国に90名の募集をかけたが50名しか応募がなく、予算も全く不足しているという(震災前の一般会計予算は約100億円だが、復興には1,500億円必要であるとの試算がある)。

日本はどの自治体でも災害が発生するのリスクがある、しかし実際にどこの自治体が被災するかはわからない。それを全て一自治体の責任で復旧・復興をがんばれというのは、無理な話である。もっと国が積極的に予算措置をするべきではないかと強く思った。

大変お忙しい状況の中、視察にご対応頂いた、関係者各位にこの場をお借りして御礼申し上げます。

品田 ひでこ 委員

被災地熊本市・益城町の復興への思い

「大河ドラマいだてん」のまち玉名市の取組み

益城町は、被災4か月後に最初に視察に入りました。その時は、活断層のずれた地点を視て驚き、まち全体が壊れた家屋と瓦礫が散乱した姿でしたが、今回3年ぶりの視察で、着実に復旧復興されていて、行政や市民・YMCA等の民間の方々の並々ならぬ努力がそこにあったのだと実感し力強さを感じました。



しかし、災害公営住宅の建設は進んでいるものの、経済的な面で仮設住宅に引き続き住むことを余儀なくされている方を思うと矛盾を感じます。安心した暮らしはまだまだ道半ばです。

また、熊本市民の心の寄りどころである熊本城の復興工事も着々と進んでいることも確認させて頂き、街の中はほぼ暮らしが安定している様でした。文京区と熊本市の歴史的文化の友好が益々盛んになり、市民レベルでの交流が一層進むことを祈ります。

一方、「大河ドラマいだてん」のご縁で玉名市と相互協定がこの度締結され、両自治体が結びつくことは喜ばしく思います。千載一遇のチャンスにより、玉名市の魅力と観光、地域活性化に急遽プロジェクトを組み事業展開し全国に発信された市議会や行政の取組みを学ばせて頂きました。

被災地の熊本市、益城町及び大河ドラマから観光・地域産業や活性化に取り組むお手本となるべき事業展開をヒヤリングや視察できましたことに感謝します。今回も有意義な委員会視察でした。

田中 和子 委員

キーワードは、「指定管理者」「受援力」

熊本空港から益城町へ向かう車中からの眺めは、緑が続く自然豊かな穏やかな風景であった。この地で震度7を越す大規模地震が続けて2度起こり、多くの命が失われ、現在も仮設住宅で生活されている方々がいらっしゃることに思いをはせた。

震災直後、熊本YMCAは、指定管理者として運営する体育館が益城町の指定避難所になり、避難所運営を益城町からの「委託」として受けることになった。

文京区では、指定管理者が運営する体育館が避難所になることを前提に、仕様書には避難所への協力が簡単に盛り込まれているだけである。指定管理者が避難所を運営するためには、「運営方法や役割分担、権限の委譲、運営費（金額までは無理でも）などについて前もって協定を結ぶこと」という熊本YMCAの経験を文京区も活かし、災害に備えてほしい。

熊本YMCAは自身の全国ネットワークを活かし、災害支援の蓄積がある。介護や子どもに関する専門学校をもち、そのサポートに加え、世界的に活動するNGOや国内の様々なNPOと協働できる関係を築いている。熊本YMCAは「受援力」と言っているが、文京区は協定を結ぶ友好都市から職員派遣や物資を受けることはできるだろうが、それに加えNGOやNPO、企業等との関係はどうであろうか。区の持つ「受援力」を高めねばならない。



松下 純子 委員

熊本県 熊本市・益城町・玉名市視察

視察初日は、益城町。まさかの町のほぼ全域被災からの復旧と復興に向けての取り組みと指定管理会社が上手に運営した避難所を視察出来た事は大変意味深く参考になりました。避難所でのルール決めが大切と報告書にありましたが、各避難所により様々なルール決めが必要になりますが、被災してから決めるのではなく日常的に色々なパターンのルールなどをHUGゲームなどで経験していく必要性を痛感しました。



2日目は熊本県立美術館の細川コレクション永青文庫展示室は文京区とのご縁を感じましたし、文京区にいただけでは知ることができなかった作品や学芸員の皆様のお話がとても興味深かったです。

3箇所目は日本初オリンピック金栗四三を縁に玉名市議会、玉名市視察と、「玉名市と文京区との相互協力に関する協定」締結式の出席でした。

玉名市の議会は元気でした。ご自分たちの私費で玉名市 PR ビデオを作成し、YouTube で流し観光に力を入れている姿は羨ましく、刺激を受けました。玉名市を、もっと知りたくなりました。この視察報告書をご覧下さった方々、是非玉名市PRビデオを観てみて下さい。

観て、感じて、学ぶことができた一泊2日の熊本県視察は大変有意義な時間でありました。

佐藤 ごういち 委員

「玉名市との文京区との相互協力に関する協定の締結」

益々深まる熊本との縁

大河ドラマ「いだてん」の主人公、金栗四三の生まれ育った熊本県玉名市と中学卒業後上京し、本区にある東京高等師範学校（後の東京教育大学、現・筑波大学）で学んだことが熊本県玉名市と本区の縁である。金栗四三は小学校への進学を機に、自宅から学校までの山坂を越える往復約12kmの通学路を近所の生徒たちと毎日走って行き戻りする「かけあし登校」を始め、マラソンの基礎を築くこととなった。上京後も自宅から東京師範学校まで走っていたとされ、双方実際に走ったとされる金栗四三ロードを持っている。玉名市役所では行政、議会で同じジャンパー着て一体感を出していることや、共同して作成した市のPR動画では、行政、議会「ONE TEAM」となって取り組む情熱を感じることができた。



また、文京区目白台には肥後細川庭園があり、これは幕末に細川家の下屋敷になり、明治時代には細川家の本邸となったもので、旧熊本藩主細川家伝来の美術品、歴史資料や、16代当主細川護立によって設立され、蒐集品などを収蔵し、展示、研究を行っている永青文庫（えいせいぶんこ）がある。熊本と文京区の縁はここにもあり、この度熊本県立美術館で開催されている「細川コレクション永青文庫展示室」に関する調査研究をおこない、熊本城、城下の歴史や文化を学ぶことができた。ほかにも夏目漱石など熊本県と文京区をつなぐ縁がある。

益城町の災害復旧・復興への取り組みと災害時における指定管理施設の避難所運営等に関する調査・研究では、文京区から派遣されている職員を激励し、現地に足を運び復旧状況の確認、仮設施設の現況、災害公営住宅の見学、指定管理施設熊本YMCAによる支援活動から見えてきた課題と対策の話を知ることができた。